

活 用 技 術

平成 22 年度

園地実態から見た、かき「平核無」の果実肥大に及ぼす樹体管理要因と管理の目安		
[要約] 産地において、「平核無」の果実肥大を左右する要因は、 <u>1年枝密度</u> と <u>着果密度</u> であり、 <u>L規格以上果実比率60%</u> を目標にすると、1年枝密度は10～11本/m ² 、着果密度は12～13果/m ² が目安となる。		
農業総合研究所佐渡農業技術センター	連絡先	TEL 0259-63-4102
農業総合研究所園芸研究センター 育種栽培科		FAX 0259-63-3972
		TEL 0254-27-5555
		FAX 0254-27-2659

[背景・ねらい]

県内かき主力品種「平核無」は大玉高収量生産が求められている。産地では、品質や大玉率の向上のためほ場格付け（全園地巡回調査）を実施しているが、大玉率を高くするための具体的管理の目安がない。そこで、優良生産園を含む園地実態調査を行い、大玉率を高める樹体管理要因と管理の目安を示す。

[成果の内容・特徴]

- 1 1年枝数が少なくなるにつれて果実肥大は良好となり、1年枝密度10～11本/m²で、L規格以上果実比率は60%程度となる（図1、表）。
- 2 着果数を制限し、葉果比を高めることにより果実肥大が良好になり、仕上げ摘果時の着果密度12～13果/m²、夏季せん定後の垂主枝単位葉果比16～17が、L規格以上果実比率60%を達成するための着果管理目安となる（図2、3、表）。
- 3 結果母枝密度及び結果母枝当り着果数は、着果密度から推定でき、着果密度12～13果/m²の場合、結果母枝密度は6～7本/m²で、結果母枝当り着果数は2果程度となる（図4、表1）。
- 4 表1に示す着果密度とL規格果実重量下限値190gから推定すると、収穫量は2000kg/10a以上が期待できる。

[成果の活用面・留意点]

- 1 県内2産地、樹齢30～63年生、24園地、平成19,20年の調査である。
- 2 産地のほ場格付けにおける具体的な診断基準として活用する。

[具体的データ]

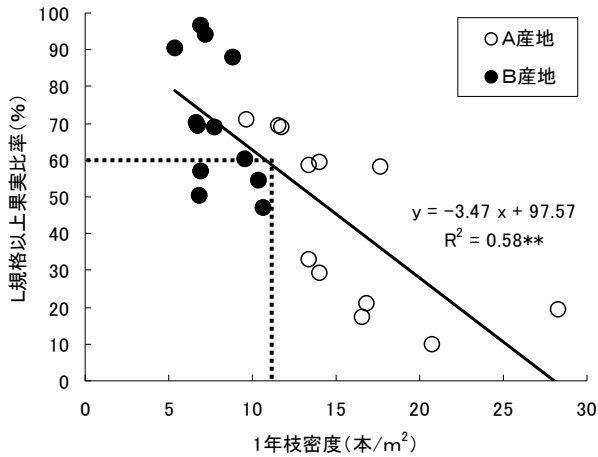


図1 枝密度と果実肥大との関係

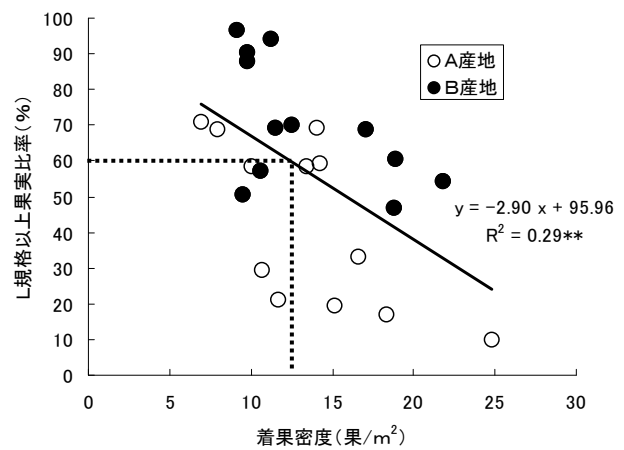


図2 着果密度と果実肥大との関係

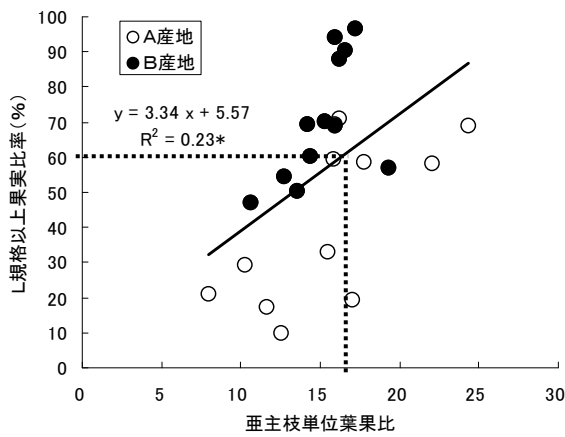


図3 葉果比と果実肥大との関係

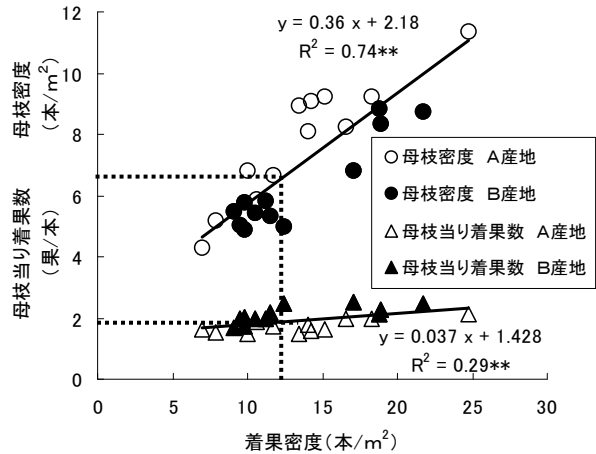


図4 着果密度と結果母枝密度、結果母枝当り着果数との関係

表 L規格以上果実比率60%を目標としたときの管理目安

確認時期	冬季せん定	仕上げ摘果			夏季せん定後
管理要因	1年枝密度 本/m ²	着果密度 果/m ²	結果母枝密度 本/m ²	結果母枝当り着果数 果/本	亜主枝単位葉果比 葉/果
目安	10~11	12~13	6~7	2*	16~17

*：結果母枝の長短により適宜調整し、平均で2程度に調整する

[その他]

研究課題名：カキの低樹高栽培における大玉高収量生産に向けた収量構成基準及びほ場格付け技術の確立

予算区分：県単特別

研究期間：平成19~21年度

発表論文等：